

旅愁の正体

—旅の情感を考える—

What is “the Melancholy of a Journey”? : Grasping its True Nature

安田 彰*

YASUDA, Akira

はじめに

- I. 旅愁の意味
- II. 旅愁の諸相—タイトルとしての旅愁—
 1. 横光利一・小説「旅愁」
 2. 唱歌「旅愁」
 3. 映画「旅愁」ならびに「旅情」
- III. 文芸による旅愁の検証
 1. 松尾芭蕉（1644～1694）
 2. 若山牧水（1885～1928）
 3. 会津八一（1881～1956）
 4. 種田山頭火（1882～1940）、尾崎放哉（1885～1926）
 5. 志賀直哉（1883～1971）「城の崎にて」
 6. 三好達治（1900～1964）「測量船」（処女詩集1930年）
 7. チューホフ（1860～1904）「犬を連れた奥さん」—恋愛と哀愁
- IV. 旅愁の正体
 1. 「旅愁」の2つの系列
 2. まとめ

はじめに

「旅愁」という言葉がある。旅の愁い……。かつてはよく使われた。

確かに一昔まで旅は非日常で、時には生死をかけた出立を決意しなければならなかった。死出の別れもあったろう。だから「愁い」は旅につきものだったのか？

それが今や「旅」という言葉より「旅行」と呼ぶ方が一般的になった。あるいは「旅愁」はもはや死語と化しているのかもしれない。「旅行」と「愁い」とはどうもなじまない。

では昔でも物見遊山の旅には「旅愁」はなかったのか？ 今でも「旅行」ではなく、「旅」に出ると「愁い」に見舞われるのだろうか？

一方「旅情」という言葉は、今でもよく使われる。いかにも旅に来ているというしみじみとした感慨だ。旅先のこの多様な情感の中で、ではなぜ「旅愁」だけが言挙げされるのか？ 喜怒哀楽の

* 本学経営学部教授

感情の中で、旅に出ると「楽しみ」ではなく、ことさらに「哀愁」が取り上げられるのはなぜなのだろうか？

本稿では、語の意味や文芸の諸相などを踏まえ、さまざまな角度からそんな「旅愁」の正体を探ってみたい。

I. 旅愁の意味

まず手始めに「旅愁」のそもそもの語義、本来の意味を吟味しておこう。いくつかの辞典に依り、引用されている事例も参考にしながら、旅愁の正体を考えてみよう。

はじめは『日本国語大辞典』（第2版、13巻）。「**旅愁**：旅先でのわびしい思い。旅のうれしい。客愁」とある。文例としては『万葉集』から8世紀後半の伴池主（生没年未詳）の歌「抱膝独咲能罽旅愁」が挙げられている。「膝を抱き独り咲（え）み能く旅愁を罽（のぞ）く」とでも読むのだろうか。時代が下って『俳諧・本朝文選』（1706）から松尾芭蕉（1644～1694）の言葉として「窓押開きて、暫時の旅愁をいたはらんとするほど」が引かれている。注目すべきは唐・杜甫（712～770）の「曉望白帝城塩山詩」が引用され、「日出清江望，暄和散旅愁」とあることだ。「日出て江望清く，暄和（暖かでのどかなさま）旅愁を散ず」というのだろうか。旅愁という言葉がれっきとした漢語であることが確認できる。

白川静『字通』（初版）でも「**旅愁**：旅のさびしさ」とあり、唐・王昌齡（698～755）の詩「万歳樓」が引かれ、「誰か登望するに堪へん，雲烟の裏晩に向かつて 茫々として旅愁を發するに」とある。

また『大漢和辞典』（修訂版・巻五）でも「**旅愁**」は「たびのうれひ。旅情のせつなさ。羈愁。客愁」とある。

ちなみに「羈」は羈旅などといって馬による旅をさし、「客」は万葉時代「旅」にこの字を用い、田に庵することを「客（たび）」といった（白川静『新訂字訓』初版、2005）。用例としては、上述の杜甫の詩句と併せ、唐・李商隱（812～858）の「送崔珪往西川詩」が引かれている。友人の崔珪が四川省へ転任する際に贈った送別の詩の一節で「年少因何有旅愁，欲為東下更西游」とある。「年少きに因り何ぞ旅愁有らん，東下して更に西游を為さんと欲す」と、旅愁は年寄りのものといわんばかりだ。あるいは左遷の気を祓い退けんと励ましているのかもしれない。

確かに昔の旅は、中国、日本を問わず、心身ともに危険を伴うものであったことはその通りだ。

前述の『新訂字訓（初版）』によれば、「旅」の字は「方+人（えん）」と「从（じゅう）」とから成っているという。本来は本貫（原籍）の地を離れることをさしたが、最古の部首別漢字字典『説文』によれば「軍の500人を旅となす」とあって、「方+人（えん）」は氏神の旗、「从（じゅう）」は「従」のもとの字で前後に相従う人をさした。当時人々は本貫の地を離れるときは、必ず氏神旗を立てて所属を明らかにし、これを「旅」といったという。当然軍旅であることが多く、旅は辛く、危険を伴ったであろうことは想像に難くない。（ちなみに、「旂・游（遊）」は「一人が旗を奉じて出行する形」で、多数の場合は「旅」といった。）

事情は日本でも同様で、『万葉集』には防人の歌を待たずとも、旅の辛さ、別れの辛さを歌ったものが多い。「草枕旅を苦しみ」と歌い出す旅の苦を詠んだものをみると、旅が心身ともに危険で苦しく、別れを伴って辛いものだったことは明らかだ。

里離れ遠からなく草枕旅とし思へば尚恋ひにけり

秋田刈る客の廬入にしぐれ零り我が袖沾れぬ干す人無しに

旅の辛さを直接に歌ったもののほかにも、旅の安全を祈り、その禁忌のことを詠んだものが多いのも宜えよう。

今度は「旅愁」より幅広い情感である「旅情」について調べてみよう。

おなじ『日本国語大辞典』（第2版、13巻）によると「**旅情**：旅でのしみじみとした思い。旅人の心情」とある。文例は『文華秀麗集・上』（818）の王孝廉の詩「従出雲州書情、寄両箇勅使」から「南風海路速帰思、北雁長天引旅情」が引かれている。「南風の海路帰思速く、北雁の長天旅情を引く」とでも読ますのだろうか。時代が下ると『北国紀行』（1487）があり「越後の府中に赴きて旅情をなぐさむる事数日になりぬ」が引かれている。

また『大漢和辞典』（修訂版・巻五）でも、「旅情」の説明として「**たびごころ**。**旅魂**。**旅思**」とあって、『日本国語大辞典』とおなじく白居易の「自江陵之徐州路上作寄兄弟詩」が引用され、「夕宿勞郷夢、晨装慘旅情」（夕べの宿は郷夢を勞り、晨の装い旅情を慘ず、か）とある。いずれにしても、「旅情」の情感は決して明るく楽しいものではなく、しみじみと哀愁を帯びていて、これまで見てきた「旅愁」と大きく変わることはないようだ。

では視点を変え、「愁い」について字義と用例を見てみよう。

まず『字通』を見ると、意味としては3つ、①うれえる、かなしむ ②かおいろをかえる、あらたまる、きつとなる ③とる、おさめる、とある。中から旅に関連するものを引用すると、まずは「**愁客**：心に愁いをもつ旅人」とあって唐・王昌

齡（698～755）の詩「秋月愁客に對し、山鐘夕天を揺がす」が引かれている。

また「**愁眠**：旅寝」では、あまりにも有名な唐・張繼（生没年未詳。没年779?）の「楓橋夜泊」が引用され、「月落ち烏啼いて霜、天に満つ江楓漁火は愁眠に對す 姑蘇城外、寒山寺 夜半、鐘聲、客船に到る」と全文が載る。改めて読み直すと、旅愁の本質と情感を余すことなく歌ったモデルともいべき見事な五言絶句である。

念のため、「愁」とならぶ「哀」についても検証しておこう。

同じく『字通』を見ると、「哀」は「①かなしい、いたむ ②あわれむ」とある。

「旅愁」に関連する語としては「**哀傷**：いたみ悲しむ」を引く。事例としては魏・阮籍（210～263）の「羈旅（旅中）疇匹（仲間）無し、俯仰哀傷を懷く」とあり、旅の道中仲間がいないのは哀しいものと、俯仰して嘆いている。

また「**哀情**：もの悲しい」もあって、これには漢・武帝（BC156～BC87）の有名な「秋風の辞」の1節が引用されている。「簫鼓鳴って悼歌を發す 歡樂極まりて哀情多し 少壯幾時ぞ、老を奈何せん」。歡樂を尽くすほどに悲哀感が増す、今は若いとはいえ自らの老いは避けられない、と嘆いている。これは必ずしも「旅愁」と重ならないかもしれない。だが「歡樂と哀傷・愁いとの関係」は考察に値する重要な課題なので、後半で改めて考えてみたい。

今度は逆に「旅」字にまつわる熟語と使用例を見て、論考の参考に資したい。拠るものはやはり『字通』である。

まず「**旅懷**：旅の思い」、引用は明・沈周（1427～1509）の「閭闔門の西、晩に舟を泊す旅懷多くは夕陽の樓にあり」。

ついで「**旅館**：宿舎。宿」、引用は唐・高適（?～765）の詩「除夜の作」より「旅館の寒燈、

獨り眠らず 客心、何事ぞ、^{うたた}轉 悽然たり 故郷、
今夜、千里を思ふ 愁（正しくは「霜」：引用者
注）鬢、明朝、又一年」。

また「旅魂：旅情」，引用は唐・杜甫（712～
770）の詩「夜」一節「露下り、天高く、秋水清
し 空山、獨夜、旅魂驚く」。

「旅夜：旅の夜」の語も見え、同じく杜甫の詩
「旅夜、懐を書す」として「細草、微風の岸、危
檣（^き高い帆柱）、獨夜の舟」とある。

さらには「^{りよちん}旅枕：旅寝」もあり、宋・蘇軾
（1037～1101）の「南山中の蟠竜寺に宿す」より
「板閣に獨り眠りて、旅枕驚く 木魚、暁に動い
て、僧に随ひて^{しゆく}粥す」とある。宿坊の眠れぬ一夜
と早朝の動き出す様子が手に取るようだ。

以上、旅にまつわる愁いにつき、各種の辞典に
あたって旅愁の正体を明らかにしようとしてきた。こ
う見てくると、中国の漢詩からだけでも、心細い
旅の様子や心情が読み取れ、当時の旅がもたらす
感慨が、今日の旅行からは想像もつかない寂寥感
や孤独感に浸されていたことが痛感される。とは
いえ、全体としては「旅にはなぜ愁いが付き物な
のか」という疑問点の本質には届かず、隔靴搔痒
の感が否めない。

II. 「旅愁」の諸相

—タイトルとしての旅愁—

そこで、今度はさらに具体的な作品に即して内
容を吟味し、その秘密に迫ろうと思う。それには
まず作品のタイトルそのものに「旅愁」と名付け
たものを検証するのが手取り早いだろう。

1. 横光利一・小説「旅愁」

「旅愁」というと、^{タイトル}ずばり題名につけた横光利
一（1898～1947）の小説を想起する。今では読む
人も少なくなっただろうが、当時は力を入れて執

筆された作品で、話題を呼んだ。

しかし、力みすぎて人物が類型的になり、おま
けに展開が遅くてもどかしく、小説としての面白
みに欠ける。作者は、西欧文明と日本独自の文
化・文明を対比させ、急速な西欧化に走る日本の
文明批判をしたかったようだ。小説手法は西欧の
ロマンにならい、登場人物にそれぞれの主張・役
割を割り振り、その対^{ダイアローグ}話のなかから、対比・対
立点と問題の所在をあぶり出そうとした意欲作で
はある。

ただし残念なことに、この「旅愁」というタイ
トルは、私たちが今検討しようという「旅愁」の
本質に深く思いを致した結果付けられたものとは
思われない。

例えば、長い時間をかけて、ようやく主人公た
ちを乗せた船が、フランスのマルセイユに着いた
時の感慨が次のように述べられた後、「旅愁」と
いう言葉は、船中の主人公に芽生えた恋心の描写
として、次のように使われている（傍線は引用者。
以下同様）。

「まったくの所、まだ見たこともないヨーロッ
パが足の下に実物となって横たわっているの
である。早くこの怪物を一つ足でぎゅうっと踏ん
でみたい。しんと息を飲み込んだ鋭い無気味な
静けさが船客たちの間に浸み渡った。物憂くな
るほどの明るい光線を浴びて、人人はただ船足
の停るのを今か今かと見守っているばかりであ
る。

矢代は、いつの間にやらゴールへ来てしまっ
た自分を感じた。船はマルセイユの埠頭へ胴を
横たえようとしている。静かな静かなそのひと
時だった。——

矢代は、今まで自分を動かして来た総ての力
もここでぶつりと断ち切れ、全く新しい、まだ
知らぬ力がこれから先の自分を動かして行くの
だと思った。やがて、船から梯子が埠頭へ降ろ

された。どやどやと梯子を登って来るヨーロッパの人間の声が聞える。]

「矢代は千鶴子がいなくなってから自分も立って鏡に姿を映してみた。なるほど少し肩が崩れているなどと思い、ネクタイの歪みを直したり、白い胸板を正したりしながら、とうとう自分も日ごろ軽蔑していた旅愁にやられてしまったと思った。事実、自分に攻めよせて来たのは千鶴子にちがいがなかったが、千鶴子も自分もバりに総がかりで攻めよられたことにもまた間違いはなかった。これが日本へ近よって行くたびに一皮ずつ剥げ落ちていくとしたら、実際は、自分たち二人は今夢を見ているのと同じだと思うのであった」

あるいは、憧れの異国を回想し、自分の身にまといついている漂流感を「旅の愁い」として、こう使っている。

「窓から外に眼を向けると、泡を集めたようにどろりとしたメタン^{ガス}瓦斯の漂う運河をへだて、互に肩を凭り合せて傾いた木造の危険な家並のところどころに、灯火を透した蚊帳の青さが、夏の名残りを見せていた。矢代はふと、大理石に囲まれたベニスの運河を思い出し、セーヌ河の重厚な欄壁の間を流れる水を思い泛べた。そして、暫くはあの河、この水と思うまにまに泛んで来る海港や、ロザンヌ、フロウレンスと連って来る、水上の灯火がしだいに幻のように閃きわたって来るに随い、も早や異国の匂いの脱けきれぬ自分の身の漂いを感じ、旅の愁いはこうしてこれから行く先ざきの自分に、深まり続いてゆくのみであろうか、もうこれは、自分からは取り去ることは出来ないのだろうか、と歎いた」

さらには、船中のある場における自分の服装に対する反省から「旅の喜びを貫いて絶えず流れていた憂鬱」を恋愛感情と絡めて次のようにいい、さらに一步踏み込んだ恋愛行動の是非を「旅情」との比較で、あれこれ言い訳している。

「由吉の暗示するところと多少の違いはあるにしろ、矢代は千鶴子に対して自分の態度を、由吉や伯爵に較べて考えずにいられなかった。たしかに自分の装いには、野暮なところなきにしも非ずというよりも、正当な愛情ある人物の取るべき態度ではなかったかもしれないと思った。しかし、そこが旅というものだとまた彼は思うのだった。旅の喜びを貫いて絶えず流れていた憂鬱は、それ自身すでに恋愛以上の清めのような物思いであった。もし千鶴子と自分とが男女の陥ち入るような事がらに会っていたなら、定めし想いの残る旅の印象はよほどこれで違っていたことだろうと思った。しかもまだ今になっても彼は自分の旅情を汚す気は起って来ないのであった。むしろ、このまま今の態度を守り通してゆくことに幽かな喜びをさえ感じるのはどういうものだろう。——あるいはも早や愛情を示す時期が二人の間から遠ざかってしまっているのかもしれないが、それなら、それもまた善しと思われる何ものかが、新しく生じて来ていることも事実だった。実際、彼と千鶴子の事件はまったく新しく、初めてこの夜出来て来ているような、異国のことではない、沈みながらもある生き生きとしたものが生れ始めているようにも思われる。」

つまりこの小説は、日本と西欧、東洋と西洋の文明比較を、登場人物の恋愛（正確には恋愛感情）を織り込みながら描こうとした未完の意欲作であって、当時の西欧崇拜熱の高揚と凋落を、旅先の異国における男女の恋心に、それも憧れと躊躇

踏の葛藤から手一つ握れぬ恋愛感情に重ねたものである。ここで使われる「旅愁」とは、こうした理想と現実という二律背反的な感情の交錯からくる愁いを単純にそういったに過ぎない。残念ながら、この小説から旅愁の本質を探ることはできなかった。

ちなみに、この小説は著者の葛藤と東西文明に対する価値観の未整理を引きずり、終戦を挟む10年間という想定外の広がりや拡散を見せ、小説としての結構を得られぬまま、著者の死によって未完に終わる。

2. 唱歌「旅愁」

次に見ておきたいのは、唱歌として有名な「旅愁」である。

これは1907年、詩人・犬童球溪^{いんどうきゆうけい}（1879～1943）によって翻訳された唱歌で、原曲はジョン・P・オードウェイ（John P. Ordway）の“Dreaming of Home and Mother”（故郷と母とを夢見て）という楽曲。同年発表された音楽教科書「中等教育唱歌集」に取り上げられ、それ来日本人に広く親しまれた。

1. 更け行く秋の夜 旅の空の
わびしき思いに 一人悩む
恋しや故郷^{ふるさと} 懐かし父母
夢路にたどるは 故郷^{さと}の家路
更け行く秋の夜 旅の空の
わびしき思いに 一人悩む
2. 窓うつ嵐に 夢も破れ
遥けき彼方に 心迷う
恋しや故郷 懐かし父母
思いに浮かぶは 杜の梢
窓うつ嵐に 夢も破れ
遥けき彼方に 心迷う

こう書き写していても、自ずから心で歌ってし

まうほど、人口に膾炙した唱歌である。ただし、改めてその抒情を吟味してみると、その内容は深い失意とそれに伴う望郷であって、これがはたして旅愁というものか、判断に苦しむ。確かに「旅の空の／わびしき思いに／一人悩む」とあって、旅の身空ゆえに、望郷の念に駆られるという設定になっている。

念のため原詩にあたってみよう。

Dreaming of Home and Mother

1. Dreaming of home, dear old home!
Home of my childhood and mother;
Oft when I wake 'tis sweet to find,
I've been dreaming of home and mother;
Home, Dear home, childhood happy home,
When I played with sister and with brother,
'Twas the sweetest joy when we did roam,
Over hill and thro' dale with mother.
(*Chorus) Dreaming of home, dear old home,
Home of my childhood and mother;
Oft when I wake 'tis sweet to find,
I've been dreaming of home and mother.
2. Sleep balmy sleep, close mine eyes,
Keep me still thinking of mother;
Hark! 'tis her voice I seem to hear.
Yes, I'm dreaming of home and mother.
Angels come, soothing me to rest,
I can feel their presence and none other;
For they sweetly say I shall be blest;
With bright visions of home and mother.
(*Chorus)
3. Childhood has come, come again,
Sleeping I see my dear mother;

See her loved form beside me kneel
 While I'm dreaming of home and mother.
 Mother dear, whisper to me now,
 Tell me of my sister and my brother;
 Now I feel thy hand upon my brow,
 Yes, I'm dreaming of home and mother
 (* Chorus)

原詩にあたってみると、どこにも旅は出てこない。楽しく甘美な少年時代を追想し、やさしかった母を恋偲んでいる。姉弟と遊びまわった谷や川を回想し、追憶に耽っている。訳詩に見られる失意や暗い喪失感、それに基づく望郷の念はどこにも見られない。むしろこの訳詩は、犬童球溪が原詩を離れて自分の思いを大胆に意訳したとみるべきだろう。

犬童球溪は熊本県人吉の出身で、ペンネームの「球溪」は球磨川溪谷の意、人吉を貫流する球磨川から採ったといわれる。苦学の末、東京音楽学校（現・東京芸術大学音楽学部）を卒業、兵庫県の柏原中学に音楽教師として赴任したものの、現地の西洋音楽排斥運動に出遭い、1年足らずで辞職、失意のまま新潟の女学校へ変わった。この新潟時代に作ったのが『旅愁』と『故郷の廃家』である。したがって『旅愁』の歌詞には、柏原中学で味わった挫折感と故郷人吉への郷愁が反映されているといわれている。そう見てくると、訳詩のタイトルとしては「郷愁」とか「望郷」とかつけるべきところを敢えて「旅愁」としたのも宜なるかな、といえる。しかしここでも肝心の旅愁の正体は見えてこない。

3. 映画「旅愁」ならびに「旅情」

ついで、映画のタイトルにつけられた「旅愁」について検証してみよう。

まずは『旅愁』（1950）、ジョーン・フォンテインとジョゼフ・コットンが主演し、ウィリアム・

ディターレが監督したアメリカ映画である。イタリアを舞台にした運命的な恋愛劇で、アカデミー主演女優賞を獲得したジョーン・フォンテインの成熟した演技が見事であった。

ローマからニューヨークに向かって飛び立った旅客機が、エンジントラブルでナポリ空港に緊急着陸する。機内で偶然隣り合わせた男女が、修理の合間をぬってヴェスヴィオ火山を望むレストランで食事を共に。キャンティーワインを2本空けて空港に戻ったところ、搭乗機は彼らを残して頭上を飛び去っていく。ところがあることかこの飛行機が地中海に墜落し、死亡者名簿には2人の名前が載る……。

男は成功を収めたアメリカの技師で、これまでの生き方に疑問を感じ、離婚の決意と今後の身の処し方を考えようとしたイタリア旅行からの帰り。一方、女は新進のピアニストで、ニューヨークでのコンサートを控えていた。人はある年代に達した時、新しく人生をやり直せられたらと叶わぬ夢を見ることがある。そんな時、運命の悪戯によってそのチャンスを手にし、しかも目の前には美しいカプリの海と魅力的な女性がいたら……。

映画はともかくとして、タイトルの「旅愁」だが、ここでもやはり題名の決定にあたっては、上述の歌唱曲と同じような齟齬が生じている。すなわち『旅愁』の原題は“September Affair”であって、正確には affair（不倫の恋）が主題であった。ところが映画は、その9月という時期をうまく捉え、この季節ならではの人恋しさを感じさせる物語になっており、邦題の「旅愁」はそれを踏まえた意図的なネーミングであった。映画は曲のイメージを損なうことなく、幻想の愛はアン・ハッピーエンドで幕を閉じる。

曲の歌詞はこうである。

September Song
 Maxwell Anderson 作詞

Kurt Weill 作曲

When I was a young man courting the girls
I played me a waiting game
If a maid refused me with tossing curls
I'd let the old Earth make a couple of whirls
While I plied her with tears in lieu of pearls
And as time came around she came my way
As time came around, she came

When you meet with the young girls early in
the Spring
You court them in song and rhyme
They answer with words and a clover ring
But if you could examine the goods they bring
They have little to offer but the songs they sing
And the plentiful waste of time of day
A plentiful waste of time

Oh, it's a long, long while from May to Decem-
ber
But the days grow short when you reach Sep-
tember
When the autumn weather turns the leaves to
flame
One hasn't got time for the waiting game
Oh, the days dwindle down to a precious few
September, November
And these few precious days I'll spend with you
These precious days I'll spend with you

季節の変化を人生の移ろいと重ねたこの歌は、その機微を切々と歌い上げたF・シナトラの絶唱によって不朽の作品となった。若い時の恋を春夏に譬え、失った時を惜しみ、中年の成熟した秋の恋と対照させて、こう歌う——「あゝ、長い長いひと時、5月から12月までは／でも9月になれば

日々は短く／秋の天気は木の葉を燃やす／もう恋の実りを待つ時間はない／9月から11月へと／日々は短くますます貴重に／だからこの残り少ない大切な日々を君と過ごそう／この大切な日々を君と過ごそう」

日が短くなるこの季節を愛の感情に重ね、歌詞は親しみやすいメロディとともに秀でている。明るい夏が終る9月、秋への季節の変わり目に対し、人が無意識に感じる感傷を上手に表現している。そしてさらに、人生の秋を迎え、夏の日時間は無くなった、残り少ない時間を君と過ごしたいという思いが豊かな余韻を与えている。

「9月の恋」あるいは「9月の出来事」とでもつけるべき邦題を「旅愁」とつけたのは、歌詞を踏まえると、確かに日本人に訴える点では秀逸であった。しかし、ネーミングの彼我における大きな違いは何によるものか、そして旅先の悲恋ゆえに「旅愁」となるのか、まだ判然とはしない。

もう一つの映画「旅情」を検証してみよう。

『旅情』（1955）はキャサリン・ヘプバーン主演による英米合作映画で、原題は“Summertime”（デヴィット・リーン監督）である。

アメリカ地方都市のキャリアウーマンで38歳のジェーンは、念願の海外旅行を楽しむ。ロンドン、パリを訪れ、オリエント急行で最終目的地である水の都・ヴェニスに到着、美人の未亡人が経営するペンションに宿泊する。美しい水上都市の観光を楽しむものの、周りはカップルや夫婦ばかり、1人旅の寂しさは埋まらない。そんな時、サン・マルコ広場で自分を見つめる中年男性の存在に気がつき、ジェーンは慌ててその場を立ち去る。翌日、偶然入った骨董店で広場の男性レナート（ロッサノ・ブラッツィ）と再会する。やがて互いに惹かれ合い、愛し合うが、デートの待ち合わせ場所に来た少年が息子で、実は彼が妻帯者であるこ

とを知る。ジェーンは行きずりの恋を断ち切るべく、ヴェニスを出立する決心をする。列車による別れの有名なラスト・シーンが心に染みるメロドラマの傑作である。

さて、ここでも映画“Summertime”の邦題は、「ヴェニスの夏の日」ではなく「旅情」となっている。あまりにも有名になった主題歌（アレッサンド・チコニーニ作曲）の日本語タイトルが、そのまま素直に「ヴェニスの夏の日」であるのと対照的である。歌詞を見てみよう。

“Summertime In Venice”

I dream of the summertime,
Of Venice and the summertime.
I see the cafes, the sunlit days with you, my love

The antique shop where we'd stop for a souvenir

The bridge, the boats below, the blue above.

I dream all the winter long
Of mandolins that played our song.
The dream is so real I almost feel your lips on mine.
And though I know we have to be an ocean apart,
There's Venice and you, and summertime, deep in my heart.

ほくは夏の日を夢見る
あのヴェニスの夏の日。
ほくには見える
カフェが、恋しい君とふたりのまぶしい日々が
土産をさがしたアンティーク・ショップ
ほくらの下には橋やボートが、ほくらの上には
青い空。

ながい冬の日、ほくはずっと夢見ている
マンドリンが二人の唄を奏でるのを。
夢はとでもせつなく、君の唇はほくに触れんばかり。

でもほくは知っている
ほくらが離れ離れの海となるのを、
ああ、ヴェニスと君、そしてあの夏の日
深く深くほくの心に……

やはり恋愛、それも美しくも悲しい恋を謳っている。もちろん『旅愁』『旅情』両者とも、イタリアという当時としては理想的な観光地を舞台にしている。おそらくこちらも「旅愁」としたかったのであろうが、すでに2年前に邦題として使われている。やむなく「旅愁」よりは幅広い情感を思わせる「旅情」で妥協したのであろう。悲恋は愁いや悲しみを強く表出するものだから「愁」「悲」の文字が欠かせない。

ここで思い起こすのは、やはりローマを舞台とした恋愛映画『ローマの休日』（1953）である。原題は“Roman Holiday”で、王女（新人オーディリー・ヘプバーン）と新聞記者（グレゴリー・ペック）との行きずりの切ない1日の恋を描いている。テレビの泉や真実の口など、永遠の都・ローマの名だたる観光スポットを登場させ、観光映画の走りとしても有名である。しかし、同じく恋愛映画で、切なさも共通と思われるのに、悲恋と感じさせる度合いや深々とした哀切感が前二者ほど強くないのはなぜだろう。それは言うまでもなく、恋愛の位置づけや描かれ方の違いからくる。

『ローマの休日』も、やはり旅先の偶然から男女が近づきになり、夢のような楽しい時間を共有する。やがて恋に落ちるが、哀しい別れの時が来る。作品の構成は同じであるのに、悲恋の度合いに深淺があるのは主人公たちの対応姿勢によるものだ。前二者が、運命的な恋愛の深淵に引き込ま

れて、人生を大きく変換させていくのに対し、後者は王女と新聞記者というそれぞれの立場をしっかりとわきまえている。結果、恋は行きずりの思いがけない一日の出来事に終わる。

ただここで注意すべきは、男女2人の人生におけるこの恋愛体験は、三者ともに甚大で、深々と人生に刻み込まれるということである。体験した時間の多寡の問題ではなく、体験の切実さ、深さが恋愛の大きな質的相違になる。そして、こうした恋愛は旅先で起こりがちではあるものの、日常生活の中でも起きるものであって、その齎す大きさ、人生への「効果」は窺い知れぬものであるという点、また旅の齎す「旅愁」そのものの力もこの「恋愛効果」と共通点がありそうだという点だけを、今の段階では言うておこう。

Ⅲ. 文芸による旅愁の検証

以上、まずは諸辞典に依り「旅愁」とそれにまつわる関連語を見てきた。その引用文献と文例から、古くからすでに中国の古典には旅の辛さや不安、左遷による煩悶等、さまざまな旅愁をめぐる感慨が語られているのを知った。

また作品のタイトルにずばり「旅愁」と銘打った小説や唱歌、映画も見てきた。旅が郷愁や望郷の念を惹き起こし、旅が感受性を敏感にして恋愛感情を生みやすくするなど、旅が人にもたらす情動や、日常の世界とは違った行動をとらせる諸相を確認した。

そこで次には、さらに旅愁の本質に迫るべく、日本の旅と旅にまつわる文芸を中心に見てみよう。

1. 松尾芭蕉 (1644~1694)

芭蕉と旅は切っても切り離せない。永遠の旅人・芭蕉の旅に対する考え方、いわば彼の旅行観ともいうべき極め付けは、やはり『奥の細道』の

「序章」だろう。あまりにも有名ではあるが、改めて確認しておこう。

月日は百代^{はくたい}の過客^{くわかく}にして、行きかふ年も又旅人も。舟の上に生涯をうかべ馬の口とらへて老いをむかふる物(者)は、日々旅にして、旅^{すみか}を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。

予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず、海濱^{かいひん}にさすらへ、去年^{こぞ}の秋^{かうしやう}江上の破屋に蜘蛛の古巣をはらひて、やゝ年も暮、春立る霞みの空に、白河の関こえんと、そゞろ神の物につきて心をくるはせ、道祖神のまねきにあひて取るもの手につかず、もゝ引の破れをつゞり、笠の緒つけかえて、三里に灸すゆるより(以下略)

芭蕉はここで自らの旅と芸術観について端的・明快に述べている。それはむしろ彼の人生観といってもいい。まずは歳月という過ぎ去る時間、年の入れ替わりを永遠の旅人と見る。そして一所不住の舟乗りや馬方については、日々の仕事や宿りそのものが旅なのだという。さらには崇敬する芸術の先人も旅を重ね、客死するものが少なくなかったとしている。そして、かくいう自分もそうした性向はいつの頃からかと、おもむろに旅立ちの覚悟を口上する。永遠に行き過ぎる歳月も、旅を仕事とする人々も、さらには客死した古人も、芭蕉には理想的な旅人と映り、うらやましくて仕方がない。そんな自分だから、旅を促す「そぞろ神」に取りつかれ、「道祖神」においておいでと招かれて、旅の準備もそこそこに、取るものもとりにあえず、そわそわと出かけてしまう。それは「何者かに憑かれて心が狂ったようだ」と自らを分析する。

ここまで芭蕉を魅せた旅とは何だったのだろうか。俳諧の道を究めんと欲し、杜甫・李白はもとより、能因や西行を始めとする古人を敬慕し、ゆかりの

歌枕の地を巡る旅を続けた芭蕉。花の下で如月の望月のころ死にたいと願った西行同様、旅人芭蕉も、理想通り「旅に病んで夢は枯野をかけ廻る」の辞世を残し50歳で客死した。

2. 若山牧水 (1885~1928)

時代は下るが、自らの文学から旅を切り離せない歌人がいる。若山牧水だ。

牧水は与えられた生命を知り尽くしたいと考え旅をする。

宇宙のもとでの小さな一存在に過ぎぬ自己、ただそれゆえに何かを憧憬し、拒絶し、煩悶する。大きな自然に抱かれた宗教心に近い寂寥感と孤独感によって彼の歌は辛くも成立していた。

まさに「けふもまたこころの鉦をうち鳴らしうち鳴らしつつあくがれて行く」なのである。

この“あくがれ”が絶えず彼を満たして、したがって“心の鉦”を打ち鳴らして旅を続けざるを得なかったのだらう。その憧憬や夢、希望が強く大きかったため、ちょうど M. メーテルリンク (1862~1949) の「青い鳥」のように、自分自身の裡に幸せの鳥を見つけることができず、チルチルとミチル同様、どこかにそれを探し求める旅を重ねたのであろう。“あくがれ”が強ければ強いほど、寂しさや悲しさが残った。

幾山河越えさり行かば寂しさのはてなむ国ぞ今日も旅ゆく (「海の声」)

白鳥は哀しからずや空の青海のあをにも染まずただよふ (同上)

初夏の照る日のもと濃みどりのうら悲しきや合歓の花咲く (同上)

いざ行かむ行きてまだ見ぬ山を見むこのさびしさに君は耐ふるや (「独り歌へる」)

やどかりの殻の如くに生かぎりわれかなしみをえは捨てざらむ (同上)

うしなひし夢をさがしにかへりゆく若きいのち

のそのうしろかげ (同上)

紫陽花のその水いろのかなしみの滴るゆふべ蜩のなく (同上)

放たれし悲哀のごとく野に走り林にはしる七月のかぜ (同上)

わがこころ静かなる時につねに見ゆ死といふもののなつかしきかな (同上)

海底に眼のなき魚の棲むといふ眼の無き魚の恋しかりけり (「路上」)

かたはらに秋ぐさの花かたるらくほろびしものはなつかしきかな (同上)

白玉の歯にしみとほる秋の夜の酒はしづかに飲むべかりけれ (同上)

動物園のけもののが匂ひするなかを歩むわが背の秋の日かげよ (「死か芸術か」)

大和の国耳なし山の片かげの彼の寺の扉をたたかばや此の手 (同上)

かんがへて飲みはじめたる一合の二合の酒の夏のゆふぐれ (同上)

夏の樹にひかりのごとく鳥ぞ啼く呼吸あるものは死ねよとぞ啼く (同上)

くもり日に啼きやまぬ蝉と我が心語らふ如くおとろへてをり (「みななみ」)

古時計とまれる針の錆びはててむなしきかたをさしてゐるなり (「秋風の歌」)

この歩み止めなばわれの寂寥の裂けて真赤き血や流らむ (同上)

藍甕に顔をひたしてしたしたに滴る藍を見ばやとぞ思ふ (「砂丘」)

磯節をきけばかなしも陸奥の山の奥の唄をきけば悲しも (「朝の歌」)

酔ひぬればさめゆく時のさびしさに追はれ追はれてのめるならじか (「白梅集」)

疲れはてて帰り来れば珍しきもの見るごとくつどふ妻子ら (「さびしき樹木」)

疲れ果て眠りかねつつ夜半に飲むこのウキスキイは鼻を焼くなり (「黒土」)

海鳥の風にさからふ一ならび一羽くづれてみなくづれたり（「山桜の歌」）
時雨ふる野口の築の小屋にこもり落ちくる鮎を待てばさびしき（同上）

3. 会津八一（1881～1956）

平仮名の分かち書きの歌で知られる会津八一は、たびたび古都奈良に遊び、多くの秀歌を残した。それらを集め、世に送り出したのが歌集『南京新唱』である。これは奈良の風光と古寺古仏を愛した八一の絶唱ともいうべきもので、彼もまた旅の中から詩情の多くを汲み取った歌人であった。

ただ八一は牧水とは違って、子規の影響から俳句を学び、また教育者としての情熱も傾け、東洋美術の研究家として一家を成し、さらには書にも一家言ある多才の文士であった。この青年時代の奈良旅行が八一を俳句から短歌へと転換させた大きなきっかけとなった。旅の力の大きさが知られる。ちなみに「南京」とは京都の南にある奈良のことである。

みほとけのうつらまなこにいにしへの
やまとくにばらかすみてあるらし
（香薬師を拝して）
（み仏のうつら眼に古の大和国原霞みてあるらし）

新薬師寺本堂の西にある香薬師堂、そこに安置されていた「香薬師」の愛称で知られる金銅造薬師如来立像を見ての歌である。新薬師寺には香山薬師寺または香薬寺という別名があった。「香薬師のうっとりとした眼には古代の大和の国が春霞にかすんでみえているらしい」と、八一は白鳳の御仏を薫り豊かに、また格調高く歌っている。

ちかづきてあふぎみれどもみほとけのみそなはずともあらぬさびしさ

（近づきて 仰ぎ見れども み仏の 見そなはずとも あらぬ 淋しさ）

続いて謳われた歌、「うっとりとした眼差しの香薬師に近づいて仰ぎ見るのだが、はるか彼方を見られているようで、私をご覧になっているようには思えない、この寂しさよ」という歌意だろう。字義は「自分を見ていないのでさびしい」ととれるが、それは同時に像の備えた特有のまなざしからくる寂しさでもあって、八一の旅する心境や仏の慈悲心に通じる寂寥感でもあったろう。ちなみにこの仏像は3度の盗難に会い、今は見ることが出来ない

おほてらの まろきはしらの つきかげを
つちに ふみ つつ ものをこそおもへ
（唐招提寺にて）
（大寺の丸き柱の月影を土に踏みつ物こそ思へ）

大寺の金堂の丸い列柱が降りそそぐ月の光で石畳にくっきりと黒い影を落としている。それを踏みながら、八一は鑑真和上や遣唐使を偲び、懐古の情に耽っている。

あめつちに われひとり いて たつ ごとき
この さびしさを きみは ほほえむ
（夢殿 救世観音に）
（天地に われ一人いて 立つ如き この淋しさを 君は微笑む）

「この壮大な天地の中、たった一人で立っているような心細い私の実存、そんな気持ちで仰ぐ私の寂しさに、みほとけは慈悲深くほほえんでおられる」一平易に歌われた一首だが人の心を打つ。八一と仏像との間に交わされる「さびしさ」と「ほほえみ」の交流、一歩踏み込んでそう味わう

とさらに深い感慨を催す。

天地の中たった一人立つ人間存在の寂しさ、それは同時に救世観音の寂しさでもある。観音像の持つ寂しさが八一に人間存在の「さびしさ」を呼び起こし、作者と観音そのものが渾然一体となったのではないか。その寂寥感にまつわる「ほほゑみ」は、目の前に立ち現れた観音仏の幽玄な佇まいや慈悲心からまず発せられた。それがさらに悲劇の皇子・聖徳太子の一生や当時の一族のかなしい運命を想起させ、さまざまな思いの錯綜を生んだに違いない。この一首にはそうした深い背景に対する作者の思い入れが秘められている。

聖徳太子そのものを刻んだとも言われる救世観音像。仏教を厚く信仰しその興隆につとめた聖徳太子は剛強の人であった。と同時に、胸の深处に底知れぬ深い悲しみを抱いていた人でもあったろう。そんな複雑な思いがこの夢殿救世観音から溢れ出て、人々はこの像に惹かれる。世を救わんとする悲願が、ひとの心に静かな深い哀しみを引き起こすのであろうか。

くわんおん の しろき ひたひ に ようら
く の かげ うごかして かぜ わたる
みゆ (奈良博物館にて)
(観音の 白き額に 瓔珞の 影動かして 風
わたる見ゆ)

「観音の白い額に、宝冠から垂れている瓔珞の影がかすかに動いている。通り抜けるその春風が目に見えるようだ」——ここで歌われている観音は、法輪寺の巨大な十一面観音だとも、奈良博物館に出展された虚空菩薩だともいわれている。歌の要は、本来動くはずの無い固定された瓔珞（金属）が動いたとして、そこに微風を見たとき歌い上げたところだ。芸術の要諦は歌われている事柄が事実かどうかではない。作者の感性や感受性が対象をどうとらえ、その結果心象がどう作品に投影

されているかにかかっている。瓔珞の鳴る音まで聞こえてくるような春風を感じさせる、見事でさわやかな観音像の歌である。

おし ひらく おもき とびら の あひだ
より はや みへ たまふ みほとけ の
かほ (法隆寺の金堂にて)
(押し開く 重たき扉の 間より 早や見え給
う み仏の顔)

「寺の案内人が押し開く法隆寺金堂の重い扉がまだ完全に開いていないのに、その隙間から早くもみ仏のお顔がもう私の目の前に現れた」——開かれていく扉から差し込むわずかの光の中に現れる仏たちへの賛美、静かな伽藍に響きわたるその軋みや轟き、それはまことに餘韻深いもので、刹那の感動が見事に表現されている。

以上、会津八一の奈良を詠んだ絶唱を見てきたが、名利や仏像の織り成す旅先的情绪は、静謐にあふれ、心落ち着かせるものであった。それは明るい華やかなものというよりは、人をして物思いにいざなう感情、あえて言うなら哀情に近い、いわゆる旅愁めいたものではなかったか。

短歌の次には俳句、それも放浪に身を預け、その中から蚕の糸のように珠玉の作品を紡いだ2人を見てみよう。

4. 種田山頭火 (1882～1940)、尾崎放哉 (1885～1926)

山頭火、放哉はともに季に捉われない自由律俳句の著名な俳人で、同じ井泉水門下であった。ふたりともに酒癖によって身を持ち崩し、師である萩原井泉水 (1884～1976) や俳句支持者の援助によって生計を立てていた。しかしその作風は対照的で、「静」の放哉に対し山頭火の句は「動」と言われる。

まず山頭火の句（『草木塔』より）。

どうしようもない私が歩いている
分け入つても分け入つても青い山
うしろすがたのしぐれてゆくか
笠にとんぼをとまらせてあるく
鴉啼いてわたしも一人
酔うてこほろぎと寝ていたよ
また一枚脱ぎ捨てる旅から旅
あるけばかつこういそげばかつこう
うどん供へて、母よ、わたくしもいただきます
る
ここで寝るとする草の実のこぼれる
生死の中の雪ふりしきる

山頭火の句で心打つうものは、漂泊中の作がほとんどだ。

全く一人の漂泊の中から生死の間隙を見、命の限界を生き切っている。その道行の喜びと悲しみを託した短い言葉に私たちは打たれる。

幼時に母が自殺するという不幸な出来事もあってか、精神的に不安定で、酒におぼれ、生活者としてうまくゆかなかった。その後出家し、観音堂の堂守となったが、やがて行乞^{ぎょうこつ}の旅を始め、一時は庵に住したものの、諸国を巡って漂泊することが多かった。最期は松山市の一草庵（いっそうあん）で没した。

ついで放哉の句。

咳をしても一人
墓のうらに廻る
足のうら洗えば白くなる
肉がやせてくる太い骨である
いれものがない両手でうける
考えごとをしている田螺が歩いている
こんなよい月を一人で見て寝る

一人の道が暮れて来た

春の山のうしろから烟が出だした（辞世）

旅を続けて句を詠んだ山頭火の句が「動」であるのに対し、放哉の作風は確かに「静」である。句に無常観があり、さりげない諧謔性や洒脱味が滲んでいるのが魅力となっている。しかし、彼もまた人格的に問題点の多い一種の性格破綻者で、酒も辞められず、寺男などを転々とした。小さな庵と海のある場所に住みたいということから、晩年を小豆島のある寺で寺男として暮らした。井泉水や俳句理解者の支援で生を全うしたものの、島での評判は極めて悪かった。

ここに見るように、漂泊の2人の俳人は、旅そのものを生活とし、旅の中からおのれの詩情をくみ上げた。どの作品にも、あふれ出ているのはまぎれもない「旅愁」である。

5. 志賀直哉（1883～1971）「城の崎にて」

韻文から散文に移る。

志賀直哉は「白樺派」を代表する小説家のひとりであり、その簡素で無駄のない文体と置き換えようのない適切な描写から「小説の神様」とまで言われた。ここでその無類の名文で、かつ心境小説の代表的な作品とされる短編小説「城の崎にて」を見てみよう。

彼はある時、山手線の電車に後からはね飛ばされ重傷を負う。暫く入院して助かったが、後療養のために兵庫県の城崎温泉にしばらく滞在する。まさに本稿の狙いである旅愁の秘密を探るのに格好の文章といえるだろう。なぜなら、一人旅の時間の中で、事故の体験と身の回りの小動物の死をめぐって、彼ならではの徹底した観察力で生と死の意味を考えた小説だからである。

宿に療養中の「自分」は一匹の蜂の死骸に、寂しいが静かな死への親しみを感じる。また、首に串が刺さった鼠が石を投げられ、必死に逃げ惑っ

ている姿を見て、死の直前の足掻きが恐ろしくなる。そんなある日、何気なく見た小川の石の上にイモリがいたので驚かそうと石を投げる。だが自分の意図に反し、石はそのいもりに当って死んでしまう。「自分」は哀れみを感じると同時に生き物の淋しさを感じる。これらの動物達の死と生きている自分について考え、生きていることと死んでしまっていること、それは両極ではなかったという感慨を持つ。そして命拾いした「自分」を改めて省みる。

小説のあらすじは以上だが、要所をいくつか原文から引いてみよう（傍線は引用者）。

「一人きりで誰も話し相手はない。読むか書くか、ほんやりと部屋の前に椅子に腰かけて山の往来だのを見ているか、それでなければ散歩で暮らしていた。」

「冷々とした夕方、寂しい秋の山峡を小さい清い流れについて行く時考える事は矢張り沈んだ事が多かった。淋しい考えだった。然しそれには静かないい気持がある。自分はよく怪我の事を考えた。一つ間違えば、今頃は青山の土の下に仰向けになって寝ている所だったなど思う。青い冷たい堅い顔をして、顔の傷も背中傷も其儘で。(中略)自分は死ぬ筈だったのを助かった、何か自分が殺さなかった、(中略)然し妙に自分の心は静まってしまった。自分の心には、何かしら死に対する親しみが起こっていた」

「自分の部屋は二階で、隣の無い、割に静かな座敷だった。読み書きに疲れるとよく縁の椅子に出た。脇が玄関の屋根で、それが家へ接続する所が羽目になっている。其羽目の中に蜂の巣があるらしい。虎斑の大きな肥った蜂が天気さえよければ、朝から暮近くまで毎日忙しそうに

働いていた。(中略)自分は退屈すると、よく欄干から蜂の出入りを眺めていた」

「或朝の事、自分は一疋蜂が玄関の屋根で死んで居るのを見つけた。足を腹の下にぴったりとつけ、触角はだらしなく顔へたれ下がっていた。他の蜂は一向に冷淡だった。(中略)それは三日程その儘になっていた。それは見ていて、如何にも静かな感じを与えた。淋しかった。他の蜂が皆巣へ入って仕舞った日暮、冷たい瓦の上に一つ残った死骸を見る事は淋しかった。然し、それは如何にも静かだった。」

「夜の間にひどい雨が降った。朝は晴れ、木の葉も地面も屋根も綺麗に洗われていた。蜂の死骸はもう其処になかった。今も巣の蜂共は元気に働いているが、死んだ蜂は雨樋を伝って地面へ流し出された事であろう。(中略)それにしろ、それは如何にも静かであった。忙しく忙しく働いてばかりいた蜂が全く動く事がなくなったのだから静かである。自分はその静かさに親しみを感じた」

「自分は鼠の最期を見る気がしなかった。鼠が殺されまいと、死ぬに極まった運命を担いながら、全力を尽して逃げ廻っている様子が妙に頭についた。自分は淋しい嫌な気持になった。あれが本統なのだと思った。自分が希っている静かさの前に、ああいう苦しみのある事は恐ろしい事だ」

「いもりは死んでしまった。自分とはんだことをしたと思った。(中略) いもりにとっては全く不意な死であった。自分はしばらくそこにしゃがんでいた。いもりと自分だけになったような心持ちがしていもりの身に自分がなってその心持ちを感じた。かわいそうに想うと同時に、

生き物の淋しさをいっしょに感じた。自分は偶然に死ななかった。いもりは偶然に死んだ。自分は淋しい気持ちになって、ようやく足もとの見える路を温泉宿の方に帰ってきた。遠く町端れの灯が見えだした。死んだ蜂はどうなったか。その後の雨でもう土の下に入ってしまったろう。あの鼠はどうしたろう。海へ流されて、今ごろはその水ぶくれのした体をごみといっしょに海岸へでも打ちあげられていることだろう。」

「生きていることと死んでしまっていることと、それは両極ではなかった。それほどに差はないような気がした。もうかなり暗かった。視覚は遠い灯を感じるだけだった。足の踏む感覚も視覚を離れて、いかにも不確かだった。ただ頭だけが勝手にはたらく。それがいっそうそういう気分^{気分}に自分を誘っていった。」

「城の崎にて」は旅先でのちょっとした体験から生死を考えた文章である。とりわけ「偶然の死」ということをテーマにしていることもあって、受ける印象は「悲惨」という言葉より「悲哀」という情感であって、静謐で、落ち着いたものとなっている。人を含めた生き物の生死というものを、双方の関わり合いから共感と同情を重ね、即物的かつ個別具体的に描いた作品は稀有だろう。表現は簡明で含蓄は深い。

しかしながら、これを引用した趣旨は、旅というものが五感を鋭敏にし、普段なら見過ごすような事柄を観察させたり、感じたことを反芻させ、物思いや思慮を、日常以上に深める役割や効果があるということを強調したかったからである。もちろん、直哉は作家であるから、常人以上に感性も鋭敏で、思考力や表現力にたけていることは言うまでもない。でもそのプロですら、旅先での滞在によって、自分が九死に一生を得たという体験

が前提にあるとはいえ、小動物たちの生死に普段以上の関心と吸引力を感じ取ったということは出来よう。どうやら旅は感性を鋭敏にさせ、その結果旅情が豊かになるようだとということがわかってきた。

ついで、再び韻文に戻り、旅の詩集といっても過言ではない三好達治の『測量船』を見てみよう。

6. 三好達治(1900~1964)『測量船』 (処女詩集1930年)

詩集の冒頭に置かれた首題的な短歌

「春の岬旅のをはりの鷗どり／浮きつつ遠くなり
にけるかも」(「春の岬」)

は見逃せない一首である。

30歳になって初めて出されたこの遅い処女詩集は、詩人の詩心の在処、在り様を自らさぐろうとしたものであった。達治はその結果、情緒の基礎を幼年期への郷愁や旅先での旅愁においたのであった。その意味で、この主題詩は旅愁の正体を探ろうとする本稿に欠かせぬ象徴的な一首となっている。詩人は自らの詩心^{ポエジー}を旅する鷗になぞらえ、詩集に盛られた抒情の揺曳を旅の終わりに振り返っている。その情感は静かな哀愁を湛えている。

達治は同詩集中の散文詩「峠」のなかでこうも書いている(傍線は引用者。以下同様)。

「……既に旅の日数は重なってゐた。私は旅情に病の如き悲哀を感じてゐた。しかし私にあって今日旅に行く心は、ただ左右の風物に身を託して行く季節^{うた}を謳った古人の心でなければならない」

三好達治もまた、芭蕉の末裔であった。

「午後の風は胸に冷たいし、この頃の日ぐれの早さはまるで空の遠くから切ない網を撒かれるやうだ。夕暮の林から蝸がああ鋭い唱歌でかなかなかなとうたふのをきいていると私は自分の居る場所が解らなくなってなぜか涙が湧いてくる」(「燕」より)

燕に託して、旅立ちを急ぐ詩人自らの気持ちを述べたこの詩は、詩心の在処が透けて見える。すなわち鋭敏な感性が旅立ちを契機として生きる悲しみを述べたものだからである。

その意味で、この詩集は、全部が哀愁に染め上げられているといっても過言ではないだろう。「乳母車」は「淡く悲しきものふるなり」であり、「少年」では「空は夢のやうに流れてる」から。

悲哀の正体は「この道は遠く遠くはてしない道」(「乳母車」)であるからかもしれない。もちろんこの道とは「生死の道」である。

「蝶のような私の郷愁！……。蝶はいくつか籬を越え、午後の街角に海を見る……。私は壁に海を聴く……。私は本を閉じる。私は壁に凭れる。隣の部屋で二時が打つ。『海、遠い海よ！と私は紙にしたためる。——海よ、僕らの使ふ文字では、お前の中に母がある。そして母よ、仏蘭西人(フランス)の言葉では、あなたの中に海がある。』」(「郷愁」)

散文詩スタイルの傑作詩の一つで、後半の二行だけで独立・完成しているような詩だ。「母(mère)」と「海(mer)」との文字上の共通に気づいた機知からできた詩ではある。しかし「母」と「海」との連続感は文字面だけではない。国境を越えたもっと幅ひろい、甘美で哀愁を帯びた感傷という共通性や同質性が感じられる。その着目の巧緻には舌を巻く。そして「郷愁」と名付けら

れた題名からくる、懐かしい幼年時代へ遡るような不思議な哀感にも……。

優れた詩に限らず、文芸一般はこのように読む者を遠く深いところに引き連れていく。松尾芭蕉の「夏草や兵どもが夢のあと」にしても、与謝蕪村(1716~1784)の「愁ひつつ岡にのほれば花いばら」にしても、目の前に歌われた情景が浮かんでくるだけではなく、その後ろに揺蕩うある情緒—作家が訴えたかった真実、でも敢えて読者の想像力にゆだねた情感が、見えてくる。そしてそれは決まって愁いの陰りを帯びている。

たとえば、山村暮鳥(1884~1924)の「空」にしてもそうだ。

おうい雲よ／いういうと／馬鹿にのんきさうぢやないか／どこまでゆくんだ／ずっと磐城平の方までゆくんか(『雲』)

この明るくのんびりした詩の背景からは、草むらに仰向けになって空を見上げている腕まくらの詩人が見えてくる。しかし雲に呼びかける詩人の心はどうだろう。読み手が自らの事情に即して想像するほかないが、「明るい悲しみ」に満たされているような気がする。現にこの詩集『雲』の序には人の一生の短さに触れたあと「永遠を思慕するものの寂しさ」という字句が見える。

7. A. チェーホフ(1860~1904)『犬を連れて奥さん』—恋愛と哀愁

感受性が鋭敏になり、歓楽がきわまり、時として死までを思いつめる尋常ならざる心身の状態、それが「恋愛」であることは今さら述べるまでもない。

有名な三省堂『明解新国語辞典』(第5版)によれば、恋愛とは、「特定の異性に特別の愛情をいただき、高揚した気分で、2人だけで一緒にいた

い、精神的な一体感を分かち合いたい、出来るなら肉体的な一体感も得たいと願いながら、常にはかなえられないで、やるせない思いに駆られたり、まれにかなえられて歓喜したりする状態に身を置くこと」とある。

こうしたさ中の行為・行動は、通常の状態からすると考えられない、文字通り劇的な結果を招くこともあり、それが文芸の関心を引き寄せる。日本近世でいうならばいわゆる「道行（心中）」ものがそれであり、近松門左衛門（1653～1725）の人形浄瑠璃「曾根崎心中」や「心中天の網島」といった心中ものの名作を生み出した。

ただし、こうした情死に至るまでを思いつめでなくとも、恋愛は感性を鋭敏にし、日常が錆びつかせている常識を洗い落とすことがある。これは民族の如何を問わぬ人間に共通した恋愛の大きな特性である。その典型的な例として1899年にロシアの作家 A. チューホフ（1860～1904）が発表した短編小説『犬を連れた奥さん』（*Дама с собакой*）をみてみよう。

これは黒海の保養地・ヤルタで休暇を過ごすロシアの銀行家と若い婦人との不倫を描いた物語である。ロシア出身の作家 V. ナボコフ（1899～1977）は、これまでに書かれた短編小説の中でも最も素晴らしい1つであると明言し、また若い頃この作品を読んだロシア・ソ連の作家 M. ゴーリキ（1868～1936）は、「リアリズムに最後の止めを刺す作品」と賞賛した。

始めて一夜を共にした二人は、朝方海をみつめる。

「オレアンダで二人は、教会からほど遠からぬベンチに腰かけて、海を見おろしながら黙っていた。ヤールタは朝霧をとおして微かに見え、山々の頂きには白い雲がかかってじっと動かない。木々の葉はそよりともせず、朝蟬が鳴いて

いて、はるか下の方から聞こえてくる海の単調な鈍いざわめきが、われわれ人間の行手に待ち受けている安息、永遠の眠りを物語るのだった。はるか下のそのざわめきは、まだここにヤールタもオレアンダも無かった昔にも鳴り、今も鳴り、そしてわれわれの亡い後にも、やはり同じく無関心な鈍いざわめきが続けるのであろう。そしてこの今も昔も変わらぬ響き、われわれ誰彼の生き死には何の関心もないような響きの中に、ひよっとしたらわれわれの永遠の救いのしるし、地上の生活の絶え間ない推移のしるし、完成への不断の歩みのしるしが、ひそみ隠れているのかも知れない。明け方の光のなかでとても美しく見える若い女性と並んで腰をかけ、海や山や雲やひろびろとした大空やの、夢幻のようなたたずまいを眺めているうちに、いつか気持も安らかに恍惚となったグーロフは、こんなことを心に思うのだった——よくよく考えてみれば、究極のところこの世の一切はなんと美しいのだろう。人生の高尚な目的や、わが身の人間としての品位を忘れて、われわれが自分で考えたり為たりすること、それを除いたほかの一切は。

誰やら男が一人歩み寄って来た。きっと見張り人なのだろう。二人の様子をちょっと眺め、そのまま向こうへ行ってしまった。そんな些細なことまでが、いかにも神秘的な気がして、やはり美しいものに思えた。フェオドシヤから汽船のはいつてくるのが見えた。朝映に照らされて、燈はもう消していた。

『草に露が下りていますのね』アンナ・セルゲーヴナが沈黙のあとでそう言った。

『ああ。そろそろ引き揚げる時刻だね』

二人は町へ帰った。」（訳・神西清。傍線は引用者）

よく東洋の無常観や老荘の諦観、あるいは日本

人特有の^{アニミズム}有霊観や多神教が、西洋の合理主義思想や一神論との対比で取り沙汰され、西洋はそうした^{プリミティヴィズム}原初主義や不合理とは無縁だといった文脈で語られることがある。しかし「旧約聖書」にも無常観はみられるし、ギリシアの哲学者・ヘラクレイトスも「万物流転」といっており、こうした単純な東西比較は当たらない。そして、その共通する世界観・人生観は19世紀末のこのロシアの作家にも影を落としている。

チャーホフは、主人公を借りて、人の営みの繰り返しや悠久への往還、死の持つ安息感、万物流転の不変性そして永遠による魂の救済に思いを馳せている。避暑地である旅先での行きずりの恋。こうした深々とした感慨は、確かに日常生活の場では浮かばない。旅先での解放感とくつろぎ、鋭敏になった感性、それに恋心の高揚感が重なって、人間らしいしみじみとした物思いにふけていることをここで確認しておこう。

同時に、冷酷なりアリストでもあるチャーホフは、不倫を重ねる男に、人が年を重ねていくという現実をさりげなく気付かせる。これも恋愛による感性の砥ぎ澄ましの結果といえるだろう。

「彼は彼女のそばへ歩み寄って、その肩先に手をかけた。あやしたり、おどけて見せたりしようと思ったのだが、その時ふと彼は鏡にうつった自分の姿を見た。

彼の頭はそろそろ白くなりだしていた。そしてわれながら不思議なくらい、彼はこの二、三年のうちにひどく^ふ老け、ひどく風采が落ちていた。いま彼が両手を置いている肩は温かくて、わなわなと顫えていた。彼はこの生命にふと同情を催した——それはまだこんなに温かく美しい、けれどやがて彼の生命と同じく色あせ^{しほ}濁みはじめるのも、恐らくそう遠いことではあるまい。」(同上)

私たちは普段日常生活に取り紛れ、本当の自分を見つめることは少ない。心の奥にしまいこんでしまっ、改めてそれを取り出す機会のないもの、うっすらと気づいてはいてもそれと認めたくはなく、敢えて明るみに出さないもの、そうしたものは少なくない。でもそんな人生のさまざまな真実や諸相の包み紙を取って目の前に差し出したり、くっきりと描きだしたりしてくれるものがある。それがこうした恋愛であり、これまで見てきた文芸を含む芸術である。

ここで気をつけなくてはいけないのは、そうした人間の本質や真実を見せつけられた時、人は自覚や納得感と同時に喜怒哀楽の感動を覚えるが、その経験が切実で、思いが深ければ深いほど、それは悲哀や愁いを濃く帯びたものになるということだ。

IV. 旅愁の正体

1. 「旅愁」の2つの系列

さて、長い論考もようやく終盤にたどり着いた。これまでを整理するなら、「旅愁」には異なる2系列があるように思われる。一つは旅の身空の不遇を嘆く「望郷・郷愁型」、今一つは、生きること自体の本質に根ざす自覚・覚醒で、それが込み上げてきたり心を過ぎったりする「人生哀感型」である。

第一の「望郷・郷愁型」の事例として、^{こうせき}高適(?~765)の「除夜の作」を再度見てみよう。旅の身空で一人迎える大みそかの夜、孤独が詩人を襲う。

「除夜作」

旅館寒燈獨不眠、	旅館の寒燈、獨り眠らず
客心何事轉悽然。	客心、何事ぞ、 ^{うたた} 轉悽然
故郷今夜思千里、	故郷、今夜、千里を思ふ

霜鬢明朝又一年。 霜鬢，明朝，又一年

「寒々とした旅館の燈火のもと，一人眠れぬ除夜をすごす／ああ，さみしい。旅の寂しさは愈々増すばかり／故郷の家族は，遠く旅に出ている私のことを思ってくれているだろうか／今夜は大晦日，夜が明けると白髪を置いたこの身も，また一つ歳を重ねるのか」といった感慨だろうか。故郷を離れた身の不遇を，旅の身空に託っている。

こうしたパターンは，横光利一の「旅愁」，唱歌の「旅愁」をはじめ，これまでもいくつも見てきた。前にも引いた唐・張継（生没年未詳。没年779?）の「楓橋夜泊」も同工である。

「楓橋夜泊」

月落烏啼滿霜天 月落ち烏啼いて霜，天に満つ
江楓漁火對愁眠 江楓の漁火，愁眠に對す
姑蘇城外寒山寺 姑蘇城外の寒山寺
夜半鐘聲到客船 夜半の鐘聲，客船に到る

贅言は不要だろう。「愁眠」すなわち旅寝からくるさまざまな物思いで眠れないのである。旅愁の本質と情感を余すことなく歌ったモデルともいふべき見事な七言絶句である。

ついで、「人生哀感型」を見てみよう。

先に述べたとおり，生きること自体の本質に根ざす自覚・覚醒で，それが折にふれ，時宜を得て，込み上げてきたり心を過ぎたりする。その典型が前にも引いた，漢の武帝（BC156～87），44歳のときの作「秋風の辞」である（傍線引用者）。

秋風辞

秋風起兮白雲飛 秋風起りて白雲飛び
草木黄落兮雁南歸 草木黄落して雁南に帰る

蘭有秀兮菊有芳

懷佳人兮不能忘

泛樓船兮濟汾河

橫中流兮揚素波

簫鼓鳴兮發棹歌

歡樂極兮哀情多

少壯幾時兮奈老何

蘭^{はな}に秀有り菊に芳有り

佳人を憶うて忘るる能はず

樓船を泛べて汾河を濟り

中流に横たはりて素波を揚

ぐ

簫鼓鳴りて棹歌を發す

歡樂極りて哀情多し

少壯幾時ぞ老いを奈何せん

美しい秋の季節，美人と遊んだ汾河の舟遊びが忘れられない。管弦が鳴り舟歌が起こる。だが，歡樂が極まるうちにもなぜか愁いの思いが多くなる。若いときはいつまでも続かぬ，老いていく身をどうしていこうか。——権勢を究めた武帝にしてこの感慨，この詠嘆である。極めつけの歡樂のさ中にふっと萌す愁いと悲しみ。文字通り「朝の紅顔，夕べの白骨」（蓮如「御文“白骨”」），生病老死は避けられない。

武帝の愁いは，生者必滅の運命認識から歡樂を照らし出したものだが，歡樂そのものに潜む悲しみに気づいた詩人もいる。松尾芭蕉である。

おもしろうてやがて悲しき鶉舟哉

芭蕉45歳の作で，「美濃の長良川にてあまたの鶉を使ふを見にゆき侍りて」と前詞がある。篝火に煌々と照らされながら，目の前で舟が盛んに鶉飼を繰り広げる。華やかな面白さはその極に達する。やがてそれが終わって，鶉舟は川下遠く闇の彼方へ消え去っていく。その様子を見るにつれ，何とも言えぬ空虚な物悲しさだけが心に残る。句の情感はそう言ったところであろうが，鶉舟に限らず花火なども同様，夜の催事が時間的な経緯とともに齎す「歡樂尽きて哀情深し」という心理を実に見事に捉えている。現代俳人・富安風生（1885～1979）の「遠花火寂寥水のごとくなり」

も同工であろう。

芭蕉には「夏草や兵どもが夢のあと」（「奥の細道」）の句もあり、こちらは夜とは対照的に夏の日盛りの無常と寂寥を詠んでいる。要は囑目を詠むにしても、目の前の景観の奥にどれだけの人生の真実を見つめ、それを表現にまで高めるかであろう。

2. まとめ

そろそろ「旅愁の正体」を追い詰める時が来た。

上に見た「望郷・郷愁型」は、旅の置かれた特殊な状況から故郷を偲び、懐かしむものであるから、ここで論じる「旅愁」の本質にはやや遠い。近いものは「人生哀感型」であろう。生きること自体の本質に根ざす自覚・覚醒で、それが込み上げてきたり心を過ぎったりするものである。

文学者の多くは感受性や思考力が人一倍鋭敏で、旅に出なくとも人生や人間の本質を見抜く力を持っている。彼らは生活の中からその感性と知性を武器に数々の作品をものしてきた。これは文学者に限ったことではなく、音楽家は音すなわち旋律とリズムによって、美術家は色彩と造形によって、独自の個性と認識の深みを表現してきた。

その恵まれた天性の才に磨きをかけるため、多くの芸術家はまた旅をしてきた。既述の一群の文学者達は、旅を自らの表現の大きな糧とし、旅とともに生きてきた人々である。これは何も日本人に限らない。これまで見てきたとおり東西の詩人、文学者に共通する傾向なのである。

そして凡人たるわれわれであっても、旅に出るとプチ芸術家となる。旅に出て、日常の煩瑣、茶飯事から解放され、くつろぎ、心身ともに自由になる。感受性が解き放たれ、敏感になる。この時は誰もが多かれ少なかれ詩人であり、絵描きである。いわば夏目漱石（1867～1916）「草枕」の主人公の青年画家である。

人が旅に出る動機はさまざまだろう。

ひとりでゆったり見聞を深める旅、家族と非日常の時間を共有する旅、仲間とにぎやかに楽しむ懇親の旅などなど。

でも、そんな時間の中でも一人でくつろぐ、ちょっとしたひと時があるのではなからうか。たとえば、夕食前のひと時、露天風呂に一人でくつろぐ。夏であれば鯛がなき始めるたそがれ前のひと時。こんな時は疲れがゆるゆると湯に溶けだして、一息つきながら、しみじみと旅情を味わうことだろう。その感慨は人それぞれ、これまでの生活や人生経験の深さから一概には言えなからう。

しかし、たそがれていく夏の宵、遠い昔を呼び起こすような鯛の声を聞いていると、誰もがしみじみとした思いに誘われる。前詞に「無常迅速」とある芭蕉の「やがて死ぬ景色は見えず蟬の声」（元禄3年、幻住庵で秋之坊に示した句）を思い出すかもしれない。これが春の宵であるならば「さまざまの事おもひ出す桜哉」（元禄元年『笈の小文』）であったり、そこからの連想で唐の詩人・劉廷芝（劉希夷）（651～679）の「年年歳歳花相似、歳歳年年人不同」（年年歳歳花は相似て、歳歳年年人同じからず）に到ったりもしよう。この時、多かれ少なかれ、誰もが詩人になっている。

日本人であれば、その感性に蘇るのは日本の文芸の伝統、それも現代の日常生活にまで通底する季節感や無常観だといっている。それは例えば、新聞コラムでいうならば、毎年秋が近づくと引用される「秋きぬと目にはさやかにみえねども風の音にぞ驚かれぬる」（藤原敏行〔?～907〕）であったり、日々の天気予報では折に触れ出てくる24節気・72候（日本向けに改訂されているとはいえ）であったりする。『歳時記』が今なお健在であり、生活のさまざまな場面で取り上げられるのが季節の移ろいや季節の祭事であるのは、俳句・短歌人口の多さを見てもわかるだろう。ここにあるのは、日本人の人生観・価値観の伏流水ともいえるべき「うつろい」「無常観」の共有である。

しかし、我々凡人には芸術家のような適切かつ見事な表現は出来ない。その辺の事情を小林秀雄(1902~1983)はこういつている。

「美しい自然を眺めてまるで絵の様だといふ、美しい絵を見てまるで本当の様だと言ひます。これは、私達の極く普通の感嘆の言葉であるが、私達は、われ知らず大変大事な事を言つてゐる様だ。要するに、美は夢ではないと言つてゐるのです。併し、この事を反省してみる人はまことに少ない」(「私の人生観」)

ここで小林が指摘しているのは、優れた芸術家が私達に齎してくれる「美的経験のうちには、重要な哲学的直覚がある筈」だということである。

小林はまた別のところで、「見る」ということの真の意義に言及し、絵を見る人は描かれている物がしかとわかるまでは絵を見るものの、描かれている物がわかると、ああリンゴか、ああ花かと安心して、それ以上を見ようとはしない、とも言つてゐる。

日々忙しく雑事に追われ、科学万能、知性過信に陥つてゐる私たちは、自然や芸術を含め物の本質をじっくりと見つめて味わい、精神の滋養にするという習慣を失つてゐるのである。

同時に彼は「人を沈黙させる美の力」についてこうもいつている。

「美は人を沈黙させます。どんな芸術も、その創り出した一種の感動に満ちた沈黙によつて生き永らへて来た。どの様に解釈してみても、遂に口を噤むより外ない或るもの**ほか**にぶつかる、これが例へば万葉の歌が、今日でも生きてゐる**ゆえん**所以である。つまり理解に対して抵抗して来たわけだ。解られて了へばおしまひだ」(同上)

人がいつまでも自然に魅かれ、四季の変遷に心

動かされ、その怖れと優しさに満ちた存在に包まれて倦まないのも、実は自然の力が美同様に私達を圧倒し、沈黙を余儀なくさせているからだといえないだろうか。

そしてその感動は、自然や美の絶対的な力の前で、自らの命と力の限界、科学万能の過信を自覚・反省させ、人を黙らせるのである。そんな時、人が見舞われる情感は「喜怒哀楽」のいずれかといへば、「哀」の感情が大きいと言えるのではないか。

現に小林秀雄は「モーツァルト」の中で、フランスの劇作家・ゲオン(1875~1944)の言葉として、モーツァルトの魅力はつまるところ「疾走するかなしみ(tristesse allante)」だといつている。

たしかにモーツァルトの音楽は悲しみを伴う。しかもその悲しみは留まることなく、あつという間に駆け抜けてしまう。明るければ明るいほど、輝かしければ輝かしいほど、美しく、はかなく、悲しい。

音楽は本質的に時間の芸術だ。我々の生身に触れることなく流れ去つていく。そのことに思いを致せば、どんなに輝かしい曲でも優雅な曲でも、さわやかに悲しい。そして、あらゆる芸術も人生の喜怒哀楽も、よく聞き耳を立てるならばすべて短調で彩られてゐるのである。

より正確に言うならば、さまざまな喜怒哀楽に裏打ちされた人生も、この雄渾な自然のなかのほんの一角に過ぎないという自覚や再確認が行われるとき、大きな諦観に浸された哀感、愁いが人に湧き上がる。

その大きな諦観とは、古来われわれが、時代背景とともに認識を新たにしつつも、今日に至るまで共有してきたいわゆる「無常観」といつても過言ではあるまい。しかと認識はしないまでも、それは神道による八百神信仰=アニミズムや、仏教がもたらした空即是色という無常観に根差してゐよう。それは直接的な信仰や經典がもたらす力と

いうよりは、民俗風習や冠婚葬祭、伝統芸能や年中行事に根差す人生観や自然観であるといえよう。

さてようやく結論に近づいた。

俳人の岩岡中正（1948～）はある俳句雑誌のなかで「枯色一色にひろがる枯野は、人を遙かな思いへと誘って、ついには生死の思いにまで至らせます」といい、また自作「うなじよりしぐれはじまる殉教地」を引いて、島原の「時雨が私の髪にふれた瞬間、私もまた体ごと、時雨れる自然の一部になってしまったような、どこか信仰にも似た一体感をおぼえたものでした」ともいっている（『NHK 俳句』2012.11）。

自然のたたずまい、景観はこうした力を持っている。その自然に触れ、自分を見つめる旅こそ日常生活で付着した錆を落としてくれる。

ついた錆はしかと自覚されるものではない。だが、旅の身空で一人になる時間、何ものかが、芸術や恋愛の感動・情動と同様の力でもって私達を圧倒し、洗浄し、世俗の錆を落としてくれるのだ。

旅の情感、いわゆる旅情には、旅先での生活や営みがもたらすさまざまな喜怒哀楽があって、それらが旅を豊かにし、貴重な思い出を織りなしてくれる。しかし、これまで述べてきたとおり、大いなる喜びや楽しみも、それが極まり、感情の深みまで下りていくと「歓楽極りて哀情多し」のとおり、哀感へと転じる。愁いは人間存在の要の感

情であり、本来の自分、実存の自覚を促す感情なのである。蘇生・再生へ向けた錆落としの薬剤はこの哀情なのであり、これこそが、旅愁の正体なのである。

旅愁に浸ることは「汝自身を知れ」にもつながる。デルポイのアポロン神殿の入口に刻まれたこの古代ギリシアの格言は人間の永遠の規範づくりにも通じる。

また、日本旅行業協会（JATA）は「旅の力」を①文化の力、②交流の力、③経済の力、④健康の力、⑤教育の力という5つに分類し、その効用を説いている。今ここで考えている「旅愁」は④⑤に関係して、精神力を更生させ、自己啓発、自己蘇生、癒しに繋がると言えるだろう。あるいは第6の力として「蘇生の力」を提唱してもいいかもしれない。

古来の「旅」が楽しみの「旅行」になっても、さらにはいつの時代になっても、「独りの時間」さえあれば、人を本来の自分に引き戻し、内省を促す「旅愁」は健在なのである。

主要参考文献

- 『日本国語大辞典』（第2版、小学館、2002）
- 『字通』（初版、平凡社、1996）
- 『大漢和辞典』（修訂版、大修館書店、1984）
- 『新訂 字訓』（初版、平凡社、2005）
- 『ウィキペディア』（wikipedia）
- 『青空文庫』（<http://www.aozora.gr.jp>）
- 『現代日本文学大系』（筑摩書房、1969）